

585-11-(2)



1200501523623

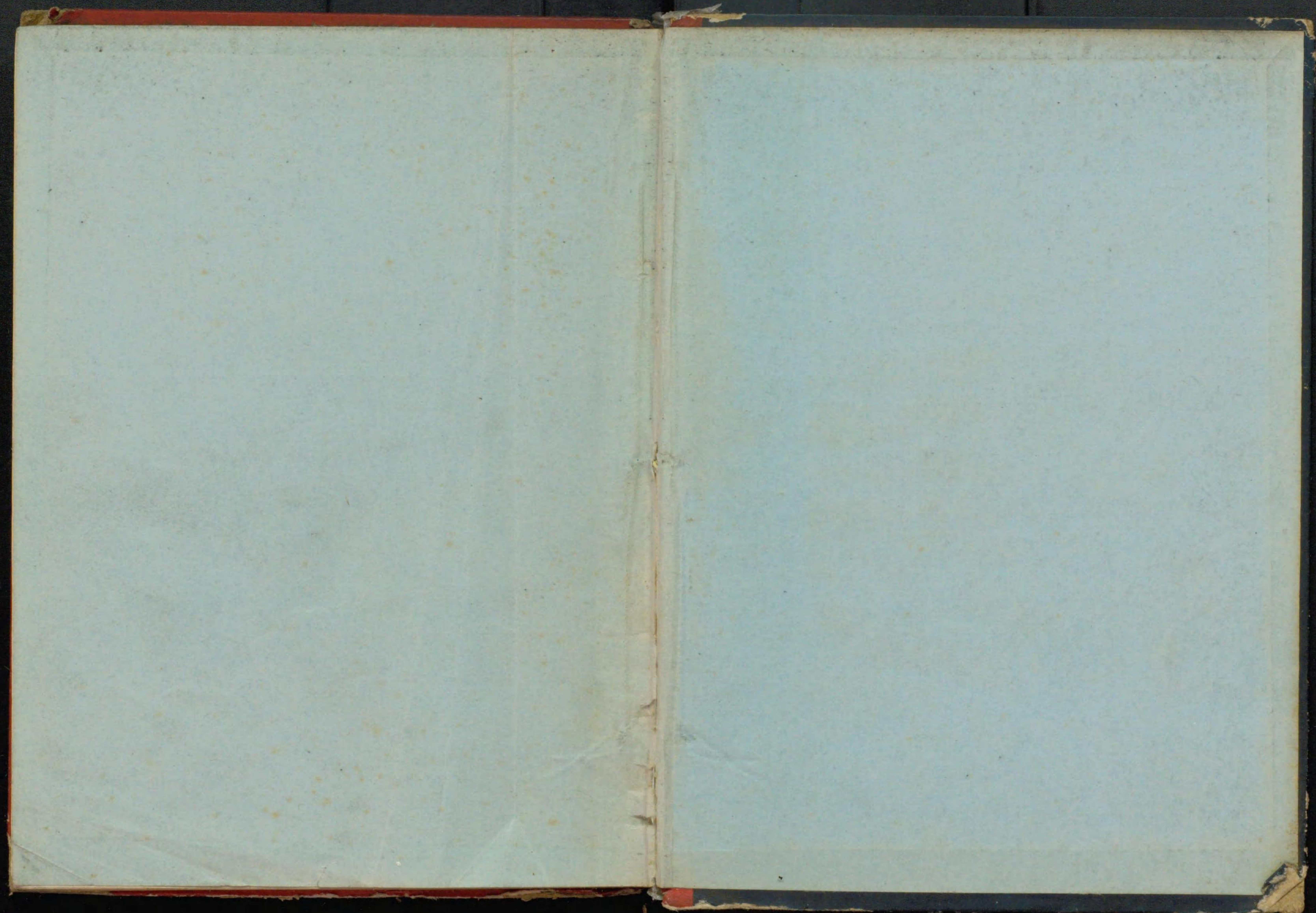
585

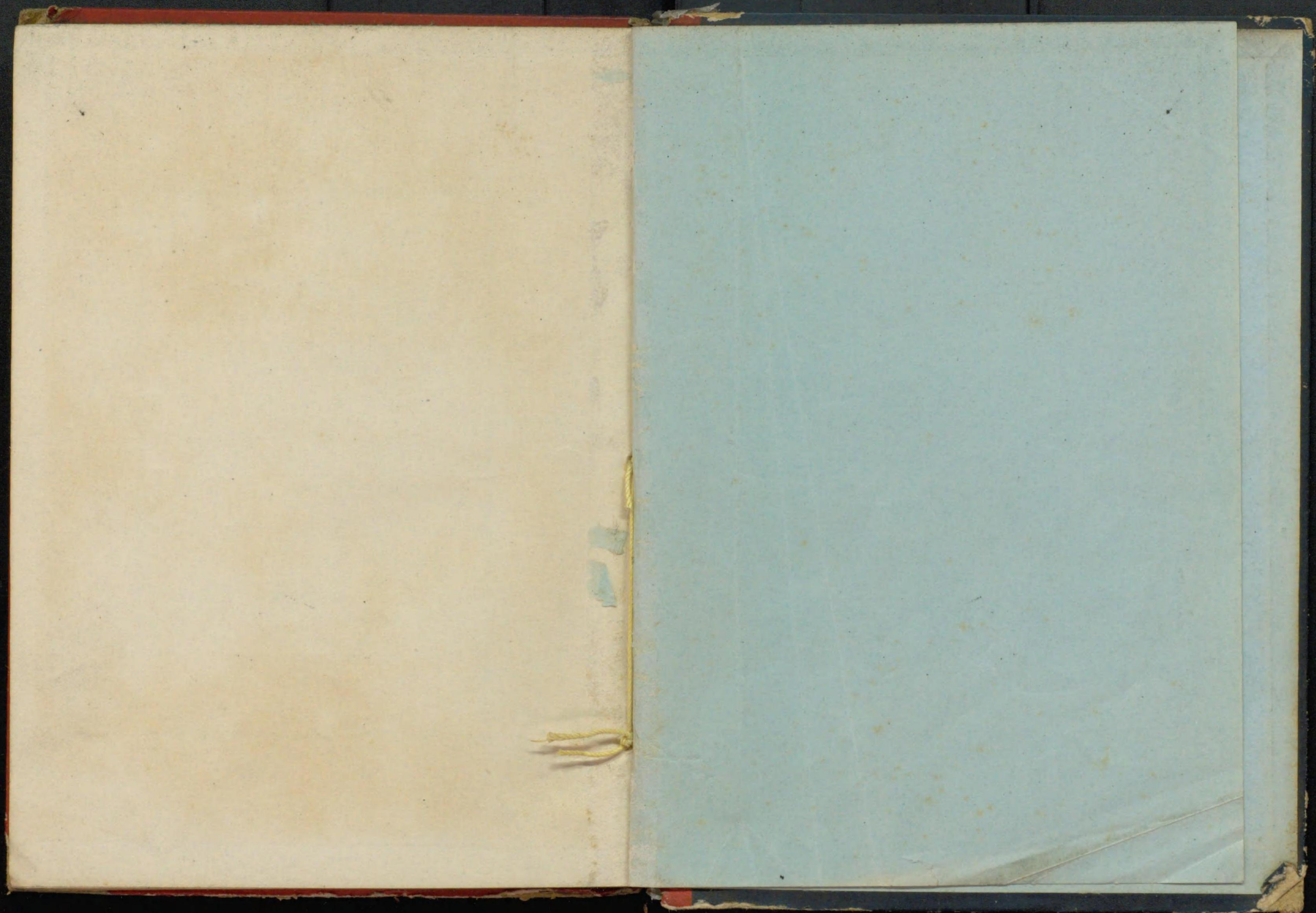
11

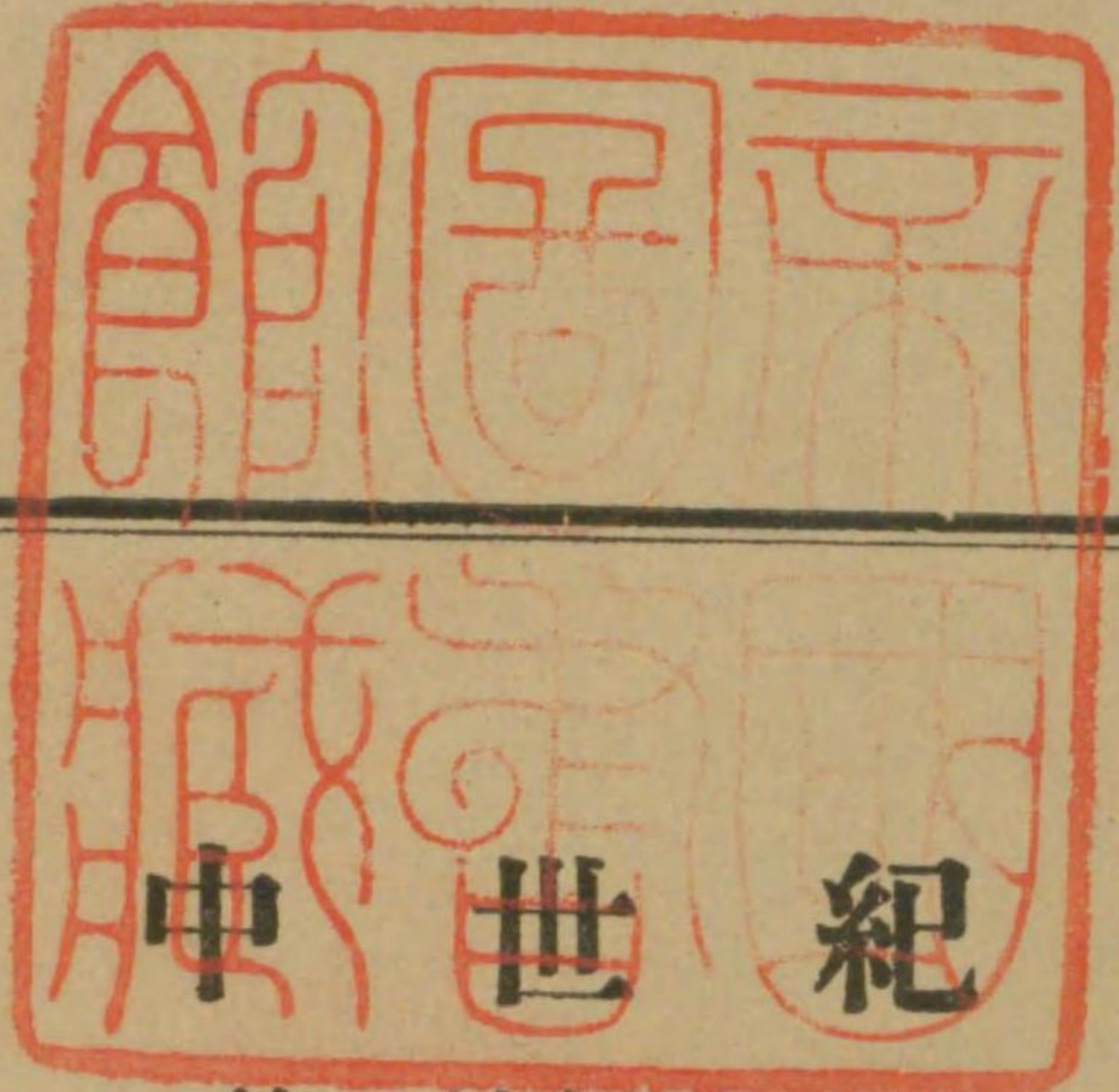
中世紀

第二端艇詩集









第二端艇詩集

1927

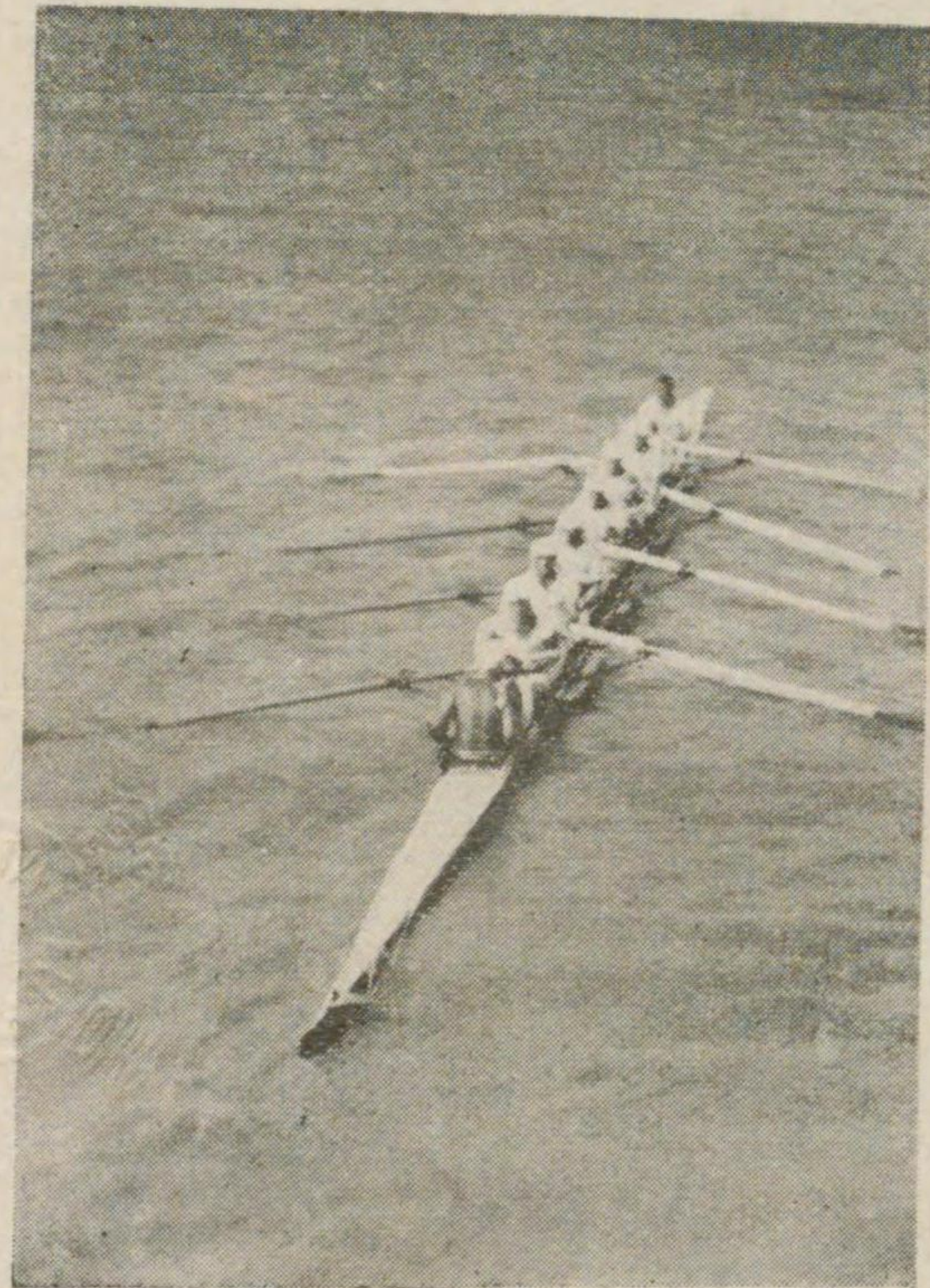
竹中久七第二集

詩之家藏版



寄贈本





WIP
1914

585-11

自序

● 私の生活は餘りにポートである。漕ぐことは私の本能の一つかも知れない。そこに私の歡びが、私のポートの詩が生れたのだ。そこにまた現在の私がポートの詩しか書けない理由がある。端艇詩集の批評の中で視野が狭いといふ非難があつたが、それは甚しい誤りである。私が發見した人生は未だ誰も歌つたことのない驚異に満ちてゐる。それ故佐藤師が私の詩を普遍性の現れであるといはれたにも拘はらず私自身には却つて特殊性を深めたものと解し得るのである。

● 私の詩の勝敗は數世紀後に來やう。海をみたことのない山國

の人も海 of 概念を知ることによつて不十分ながら海 of 詩を味
 ひ得る。現代人の生活に野球やテニス程接觸してゐないポー
 トを歌ふ私の悩みはもつとポートが一般化された時代即ち數
 世紀後に解決されるであらう。選手として合宿したものでな
 ければ達し得ない境地を知る詩人が餘りに少ないのは今日當
 然のことであらう。事實私が歌ふポートは一般人の思惟する
 所のものとは全く異つてゐる。
 感覺の詩は感覺の詩人が最もよく解するやうに運動感覺の詩
 は運動感覺の詩人が最もよく知る。何にせよ私の詩の勝敗は
 數世紀後に來やう。その時始めて私は末流の一詩人たること
 を誇らう。

中世紀目次

中世紀	二
中世紀	三
海賊になる	四
海賊ピエトロ	五
血	六
エルテル	七
沈鐘	八
アルト・ハイデルベルヒの思ひ出	九
シラノ・ド・ベルジュラツク	九

隊商になる	………	一〇
ナイスト	………	一一
ルネサンス	………	一二
フロレンス市	………	一三
ゴシツク	………	一四
城塞	………	一五
修道院	………	一六
聖地	………	一七
新航路發見	………	一八
火藥の發明	………	一九
ウイリアム・テル	………	二〇

詩

武士道華かなりし頃	………	二
素晴らしいかな人生	………	三
嵐の孤兒	………	三
幻の家	………	四
傳説	………	五
日没の歌	………	六
十字架	………	六
圓形競技場	………	七
ヴェニス	………	三
おどるジプシイ	………	三

權集

流	行	八五
キューピット	八六	
アポロになる	八七	
媾	曳	八八
バドルゴ	八九	
スタートを切る	九〇	
無色のクリュー	九一	
甲	虫	九二
處	女地	九三
五月のレガッタ	九四	
都	鳥	九五

胸の傷がいたむ	九六	
アマゾンの森	九七	
リガッタ	九八	
コンパクトにする	九九	
乾	盃	一〇〇
美	しき群	一〇一
朝	一〇二	
フォームの美	一〇三	
二人の男	一〇四	
心	臓	一〇五
黄金時代	一〇六	

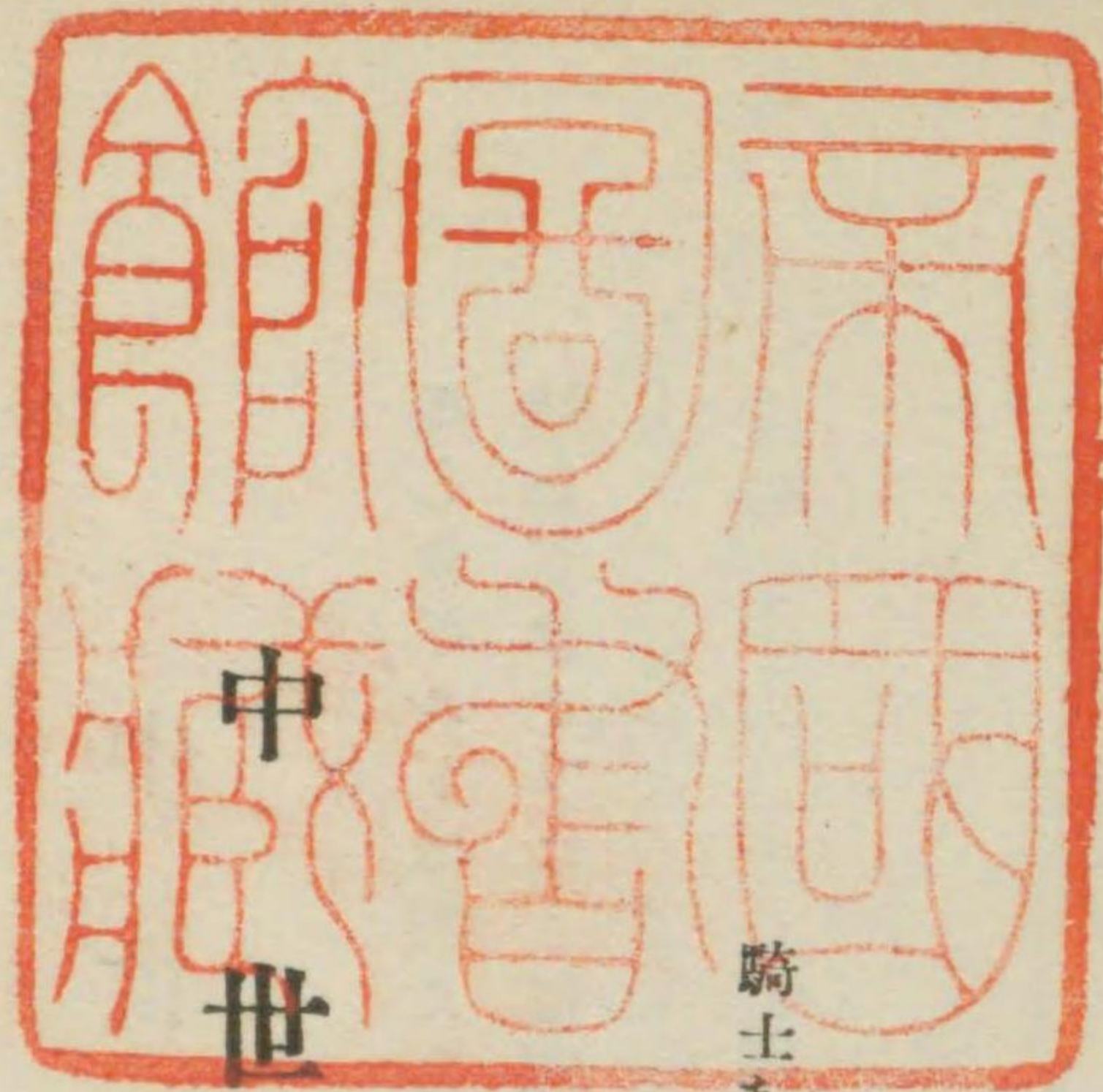
新裸體俱樂部

赤い夜	………	二五
果實店	………	二七
秋の唄	………	二九
皿	………	三一
赤い輪	………	三三
赤い白	………	三四
反抗	………	三五
新裸體俱樂部	………	三七
汗をのむ	………	三八
約束	………	三九

スバーテイング	………	一〇七
血脈	………	一〇八
スバニツシユ・セレナーデ	………	一〇九
クレオパトラ	………	一一〇
毒蛇	………	一一一
ウインダーミヤ夫人の扇	………	一一三
カメレオン	………	一一三
ユニフォームで装訂された考古學	………	一一四
野牛狩	………	一一五
平和	………	一一八
寵艇詩章	………	一二九

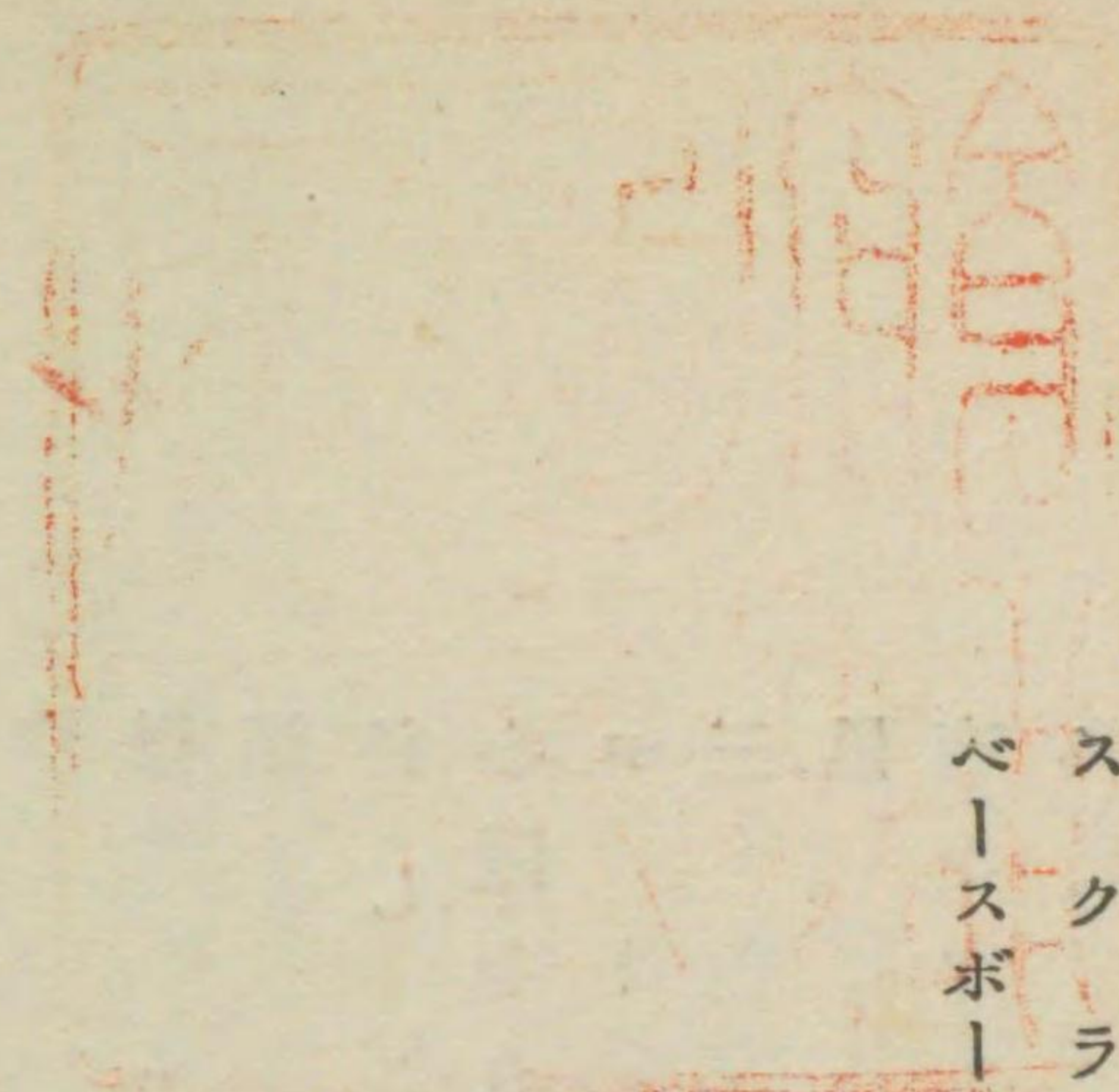
觸覺のブレード	一四〇
水をのむ彼	一四二
アトラスになる	一四二
夜 會 服	一四三
二すじの線	一四四
頭に浴びる	一四五
私はおもふ	一四六
尻	一四七
かなしげな夜	一四八
彼女をまつ	一四九
宗 教	一五〇

空 戀 愛	一五一
絹 糸	一五二
美 しい 襷	一五四
心 臓 を き く	一五五
ロ ー ヤ	一五六
三 色 旗	一五七
黒 奴	一五九
夜 を す て る	一六〇
ホツケーゲーム	一六一
牧 球 の 歌	一六二



騎士を歌つた宮庭詩人自身が騎士であつた。

紀



ベースボールゲーム	スクラム	雪
.....
一五	一四	一三

中世紀

美しきギルドは燃えるが如き工藝をつくる。
睦まじきクリューは颯爽のストロークをひく。

海賊になる

短剣を手にしたら港の女も大事な生命も惜くない。
オアアを握つたら見てゐる女の美しさも心臓の苦しさも忘れてしまふ。

海賊ビエトロ

拐した女の金髪をビエトロは人知れず戀した。
勝つた金賞牌メダルを漕手は大事にしまつて置いた。

血と砂

華かな人々が熱狂する。
闘牛士の血汐は赤々さ砂に染つた。
オアアの泡はくるくるさ川に渦卷いた。

エルテル

一發の銃聲をきいた瞬

若きエルテルの死を人妻ロツテは心から悲んだ。

よき競漕者の敗辱が勝つた彼にはたまらなく氣の毒になつた。

沈鐘

沈んだ鐘は悲しい韻をたてる。

消へたオアーの泡は苦しい心臓にひびく。

アルト・ハイデルベルヒの思ひ出

8

美しいケティは一溢のビール樽のやうに人々をよろこばした。
睦しいクリューは強健な心臓のやうにコーチに可愛がられた。

シラノ・ド・ベルシユラツク

さあ、おれの鼻を笑つた奴は剣をこれ！
さあ、おれのフォームを嘲つた奴はオアアをこれ！

9

隊商になる

隊商^{キャラバン}は東洋の珠玉と印度の香料と土人の珍寶をもつて祭市に集る。

地方のクリュー^{ビーフ}は粒よりの筋肉と熱烈な意氣^{スピリット}と^{トラチシヨナル}傳統の漕法をもつて神宮レースに集る。

ナイト

熱と俠氣のまゝに

騎士は美しき女性のために決闘して刺された。彼は弱きクリューを率ゐて努め遂に敗れた。

ルネサンス

ヴィナスの曲線こそ美だつた。
ストロークのスウィングこそ美だつた。
忘れられてゐた美だつた。

フロレンス市

武装した暗黒時代の藝術の宮殿である。
クロスレス接戦にもスポーツマンスピリットを失はぬ漕手である。

ゴシック

力學的なゴシック建築の美さ、
ヘルメス型筋肉の漕手の美さ、
無駄のない美さ、

城壁

中世紀の城塞は深い壕にかこまれてゐる。
クリニーの筋肉は青い水にかこまれてゐる。

修道院

清かな祈りは美しい處女のトラピストによつてさゝけられた。
烈しい覇氣は若き男の漕手によつてもやさされた。
戀愛のない生活はほんごうによい。

聖地

十字軍騎士にまつて沙漠は戀人よりも美しかった。
漕手にまつて川は銀座の舗装路ペイパメントより美しかった。

新航路發見

羅針盤と天文術とコロンの大膽が航海する。

一九二四年舵手の障と漕手の運動感覺と私の
意志が新荒川放水路を航く。

火薬の發明

すばらしく新しい彈道がこても鮮かなフエッシングを射ぬいた
猛烈に速いピッチがはるかに美しいフォームを漕ぎぬいた。

ウイリアム・テル

紅く熟れた航路標の新鮮だ。
舵手がねらひをつけた林檎だ。
悲壯な舳先がこぶ。
ボートを射る・水脈の唸りだ。

WHEN KNIGHTHOOD WAS IN FLOWER

撓劍が水を刺す
權先の冴えだ。
追ひせまる鬪心の焰よ
救ひだした歡喜を抱いたナイトは
驕艇に騎つてはしる。

ISN'T LIFE WONDERFUL

もう惨めな筋肉の飢もない
深刻な生存競争のあとだ。
優勝旗をまごふた戀人の燦々よ
クリューの洪笑が晚餐の食卓に匂ふ。

ORPHANS OF THE STORM

貴旗を滅す冷い挽刃だ。
盲者を虐けるさけがたい敗憐だ。
今日も哀しい意氣を吹さらされ。
まだ勝利をみたこともない。
ノートルダム寺院にすてられた筋肉よ。

THE ENCHANTED COTTAGE

24

醜い筋肉を受ける艇愛の幻覺よ
不具の肢撓をなほす意氣の奇蹟よ
鋭い運動神經が烈しく接吻する。
あゝ幻の家に住む家艇クックほど美しい人生はない。

傳 説

たくまשיきしゝむらに
おさへがたい食欲を感じる季節シーズンだ。
赫々たる神活は
すぐれたる七人を犠牲に選び
あゝ霸氣の迷宮に送りリガッタの怪獸をたゞかはしめる。

25

日没の歌

白衣の回々教徒が
沙漠の地平線に落ちる太陽を拜んでゐる。

白いユニホームの漕手が
今日一日慈光^{ひかり}に浴して快く練習した喜びを感謝してゐる。

白晝の炎熱に耐へたあこには
つよい かない信念がもえてゐる。

十字架

私達は勝利を祈る。

そして額に固く白木綿を十字に結ぶ。

そこに偽りない覇氣がある。

戀人の胸には十字架がかけてある。

この信仰のしるしをみる人は

私達の愛がどんなに強いかわかるだらう。
あゝ美しい私達の幸福はどこまで高漲するか。

圓形競技場

鮮血あけに染つた圓形競技場だ。
たゞかひおへた心臓だ。

ヴェニス

潮汐しほの上に造船つくられた季節シーズンの島市まきは美しい。
そこには力學的の空地もない。
空には高くスウイングの設計がのび、
水にはオアーの商業の殷熾だ。

おどるジプシイ

ぐる ぐる ぐる 野天の下でおどつてゐる。
華かな心臓の結婚式
ぐる ぐる ぐる 若い血汐の輪がおどる。
赤いジプシイ娘が狂舞する。

詩
權
集

季節

心臓にも季節がきた！
候鳥は快い感覚を翼檣トアリにふるはしながら
青い一線を漕いでゆく。
紺藍を翔ぶ舳の颯爽よ
川にも季節がきた！

スフィンクス

砂嵐サンドストームの興奮、
熱い旋風が顔へ上る。
おちついたスフィンクスは石の如く緊張してゐる。
紅潮もない！ 激怒もない！
おお矜漕レイスの神祕よ。

快
走

帆綱をはりつめ
帆布は切れんばかりに
風が帆船を強くする。

ひるがへつた商船旗は刃のやうに切れる。

たるみない筋肉を白いユニフォームについで

ぐつと胸を張るんだ。

血だ、赤い一線が運動神経に滲む。

舵手の瞳は飛魚のやうに潮を飛びコースの前方を快走する。

白い生物

私達は白いユニフォームを衣たら
もうなにもいはない。
不平も 反抗も 黙々として語らない。
たゞ青い水の上を動く生物だ。

牧草地に遊ぶ羊群の瞳は平和だ。幸福だ。

白い生物はあくまで柔和だ。

艶々した毛並みを刈られたメリノの背のやうに
はげしい練習にやせた身体をつむむ白いユニフォームがたるん
でも

白い生物はなほ従順だ。

アンテナ

SOSの信號でアンテナは灼熱して赤光を放つた。
疲れきつた漕手の顔は夕陽に染つて燃えた。

サーカス

サーカスの猛獸使ひは美人にかぎる。
クリューの漕手を操るには小さな舵手にかぎる。

萬國オリンピック大會

線路と枕木は國境を越えても續いてゐる。
コースとオアーは大洋を通してたゞかはれる。

鑛夫になる

暗い大氣の中で金鑛をさがす。
視線をかざして絶壁にかどやく星を堀る。
新月の焰が坑内を美しくする。
夜の漕手は天候の鑛夫となる。

夕 暮

艇の上の一日は病人の一生のやうに苦しい。
疲れた呼吸を夕焼空に吐くのだ。

椿姫は美しい咯血で
戀人との広い世界を彩つた。

夕暮

彼等のするどい感情は昂る。
彼等の愛は死よりも強からう。

食卓

素張らしい裸形の凱旋門だ。
はけしい食欲が美姫を抱擁する。

選手會

競漕の處女が戀人に選ばれるこきがきた。
筋肉の美貌が化粧した。
四肢の若さが笑つた。
火のやうな闘志がクリューの感情に接吻した。

季^{シー}

節^{ズン}

こけた血汐が水車の脈を搏つ。
空氣は心臓に花を咲かせた。
呼吸は力を彩つた。
舵手の歌は季節^{シーズン}を告げた。
水は茂り、
艇首旗のスクールカラーが香ふ。

狂へる舵手

レース前大抵の舵手は神経衰弱にかゝるといふ

怖ろしい兇器をふるつて漕ぐ・水をえぐる。
夢遊病者が舳で殺人する。
艇^{ボート}・艇^{ボート}・オア^{オール}・オア^{オール}・狂つた舵手の色情が接吻する。
彼の瞳は二重人格をもち、
彼の運動神経は慘忍性にもえてゐる。

二人の戀人

二人の戀人だ。即ユニフォームご戀愛だ。
笑へ 勝利の顔よ。

心臓は淫蕩を恥ぢる。
媚が霸氣を憤らす血の闘ひだ。

勝利を粧ふ

コースは潮汐で染められる。
クリューは潮汐で粧はれる。
ブレードには寶玉をはめるがいい。
勝利は派手な舐で濶歩する。

銚子遠航

みよ 陽に燃える銚子を、唇の黄昏を、
利根川と太平洋が抱擁する。
即ち漕手と港が接吻する。
いまクリューは遠航艇を
愛する棧橋に美しくちりばめる。
猩い潮風・岬に血がよせる。
檣がヒステリカルに身をふるはす。

風だ・一線の漕手だ

川を走る。
季節をのせて走る。
風だ。一線の漕手だ。
狂はしい疾風が遠航をつづける。

遠航

漕いでも漕いでも達しられない水平線
私は飛翔する天才を夢みてゐる。

IF WINTER COMES

季節シーズンの風よ、お前の血は冷い。
意氣の冬よ、お前のクリューは荒すまんでゐる。
さあ春へ！ 最後の一線をスタートする。

THE STONE RIDER

56

航け！ 荒せ！ 下界は闘志の盛典だ。
意氣の山巔に住む悪魔の愴艇だ。
希望の翼橈をうちふりながら
永遠の競漕史を駈けてゆく彼に歡喜の女性よ。
あゝ勝利は霸氣の化石だ。

ベルト

毎日俺は労働者のやうにスライドに油をさす。
ぐるぐる ぐるぐる 同じコースを
雨の日も風の日も休まない舳の突進——
すばらしい速度でベルトはまわつてゐる。
猛烈に嚴格に正確は機械の特長だ。
おい新米！健康をベルトにまきこまれないやうに氣をつけろ

57

それには一言だつて苦しいなんて文句をいふ奴は要らないだぞ！

想ひ出

俺は着古したユニフォームを見なれた海圖のやうにひろけて懐しい想ひ出にふけてゐる。

—あの時 きれいな娘が俺たちの姿を双眼鏡でみつめてゐた
—あの時 俺たちは酒と女と音楽で迎へられた。
—あゝそれから 俺たちがふねの上で命をかけてたゝかふま
きには卑怯な真似はしなかつた。

漕 手

廣潤な紺藍の深みで發光したり、
長い尾をひきながら素張らしい速力で走る奴だ。
いつも燦々に濡れた太陽の敵だ。
その顔は深夜のやうに黒い。
その眼は星座のやうに運命を光らせてゐる。

ブレートを咲かす

ブレードを水に入れると鮮かなスクールカラー校色の花を咲かす。
たゞ水のみで自然ヒュリコに生きてゐる。
野天の下で季節を彩つてゐる。
野邊のまゝのストロークは
露に濡れた花のやうに生々してゐる。

熱

口盛の極點まで上つた熱度計は
もう破裂して赤く彩るばかりだ。
赤い襟のユニフォームを衣た漕手は
オアーをにぎつたまゝ死んでもいいとおもつた。

綱渡り

兩舷八本のオアーが平均をこつてゐるんだ。
艇底は水脈にすれすれに乗つてゐるんだ。
ぐらりと調子がくずれたらそれまでさ。
運ミ度胸のリガッタの綱渡りはすばらしい人氣だ。

九月になれば

九月になれば
爽かに腫が沸騰するんです。

ブレーションソーダをふくませたストローをすゝる貴女の唇。

九月の空気をからませたブレードを呼吸する私の心臓。

冬 過 る

さゝやかな穴居者の戀は季節にまけた。
船が凍りついてゐる氷山は流れだした。
冬が過ぎれば
君は水に浮ぶ白いユニフォームを見出すだらう。

望 郷

いつ見ても川に懐しの情を想ふのである。
わが筋肉わが意氣の育みし地である。

生れた川を忘れない。
故郷に待つコーチを捨てない。

離れてゐる軀みが故郷の土手評を聞くとき

望郷の士氣は緊まるのである。

あゝ川へ歸つて裸になりたい。

あの丈夫な故郷の漕手達の顔がみたい。

都會へ行つた漕手はきつこ川へ歸つてくるだらう。

空氣のいい故郷で眞黒になつて漕いでゐるたくなるだらう。

水の流れる所よ、
風の廻る所よ、

川に出て昔馴染みのクリューに逢はふ。
そしたら忘れた詩がどなれるだらう。

戦勝記念塔

戦勝記念塔の涙がひかる。
戦争を浮彫した筋肉の陳列の間を
一人とほとほ感激は螺旋形に登つてゆく。
漕手の眺望はあまりに痛切だ。

修道院

勝利をいのる私は
燭臺のやうにはけしい闘志をもちやす。

森嚴な光の中に堅い信仰がわいてくるんだ。

苦しい練習を喜んで漕ぐこぎ

濁つた川に私のユニフォームのうつらぬ寂しさ。

修道院には娘を映す鏡はないんだ。

私は戀人をおもつてはいけないんだ。
不平をいつてはいけないんだ。

ゴ
ー
ル

DOON!

オアの積木が崩れる音だ。

クリューの身體が崩れる音だ。

ひるがへつてゐた艇首旗が崩れる音だ。

あゝ何もかもが力の中心を失つて崩れる音だ。

寵艇詩章

タンゴ

ブエノスアイレス本場の型でタンゴ踊れば姉御にもてる。
チームス仕込みのブレードさばきでレースに勝てる。

憧れ

ナポリよ私は死にたいお前の陽気な空の下で。
潮汐よ私は死にたいお前の華かなリガッタのさきに。



半身像

半身像は型のない下半身が必要だ。
ボートは舷にかくれたレッグワークで漕ぐものだ。

マルセイユ

マルセイユの港には地中海の明るい潮流と巨大な商船がある。
艇庫には若い元氣と長大なエイトがある。

ウオターマン

ウオターマンはリガツタの華かさにかくれて艇尾を握る。
少女は花嫁の裳裾をもつて結婚行列に従ふ。

季節シーズンの蝟螂

きらり きらり 川が 光る。
きらり きらり 鎌が 光る。
陽光は青碧の生命いのちを威す。
颯つミ するどい蝟螂のブレードが怒り、
發刺ミ 露滴に耀くオアーで紺藍の空を截る。

鏡にする

鏡にうつしてみだれた髪を粧ふ。
オアーの泡にうつしてみだれた力をなほす。

季節

木木が花を咲きだし。
私がユニホームを衣だし。

漕 手

骨が棧であらう、
脊が障子であらう、
からりこ開けた外は青空であらう。

煙 り

合宿にかへればタバコの煙り、
艇にのれば水煙り、
このクリューの勝利は會話の煙り。

女と漕手

どんないい着物より寢床がよく似合ふ女。
どんな戀人よりクリューミ仲のいい漕手。

流行

パリーの踊子が旅行する町には新しい流行がおこつた。
素晴らしい整調をもつたクリューは美事な調子をだした。

キューピット

キューピットは箭矢をはなつて戀心ハートを射る。
スターターはピストルを撃つて霸氣を射る。

アポロになる

オアアひかりやが太陽の光箭ひかりやになる。
月桂冠を得た漕手がアポロになる。

媾 曳

艇首旗をなびかせてくる。
シヨールをなびかせてくる。
見覺へある色彩をなびかせてくる。

パドル・ゴー!

始めてゆるされた接吻。
私のオア―はよろこばしく はげしく
水にふれる・血にふれる。

スタートを切る

赤い艇首旗と青い艇首旗・力の比色
漕手は水に書く。

無色のクリュー

赤のクリューと青のクリューをピツクアツプして
愚かな畫家はコースに無色をなする。

甲 蟲

夜翅をたゝんだ甲蟲の背がひかる、
艇庫に入れたボートの背がひかる。

處 女 地

味夾よあけの潮汐しほには未だ青虫が寝つてゐる。
さあ、莢豆や青瓜の露に艇をこぼそう。

五月のリガッタ

五月は玻璃の温室に咲く。
リガッタは青空の花棚に咲く。

都 鳥

水色の空をみつめてゐる鳶色の瞳、
色の白さは金髪かねかみの少女、
翼はねの軽さは處女おとめの生毛うぶげ、
もう漕手の戀人になつてもいい胸のふくらみ。

胸の傷がいたむ

彼女の白い頬はさつこ赤らんだ。
彼の白いユニホームはべつこりこり血が滲んだ。

アマゾンの森

猛獣は森林にかくれてたゝかひつかれた牙をやすめる。
漕手はアマゾンの森影に苦しきオアアを慄ふ。

リガツタ

マダムが紅玉ルビーの指輪リングをはめる。
漕手が赤いオアアを漕ぐ。

コンパクトにする

彼女はコンパクトにうつす。
漕手はオアアの泡にうつす。

乾 盃

チエリオー！　ご舵手が叫んだ。
誰のブレードにも　一滴も　のこつてゐない。

美しき群れ

うたへ　美しき群れよ
尖つた嘴　光つた瞳――
オア―はいつもやさしい容貌をもつてゐる。

朝

マダムは美くなるため体操する。
クリューは空腹になるためランニングする。

フォームの美

化粧は飾るのではなく、その美を活かさうとするのだ。
フォームの美は彼をたゞ強くするのだ。

二人の男

最純粹なガソリンを命の限り”こかいた刺青をもつた男が
る。

内心に燃える意氣を練習でやけた肌をもつた男がゐる。

心臓

貴女の胸の丸い乳房は戀をする。
私の胸の丸い心臓は艇を漕ぐ。

黄金時代

黄金時代には河は牛乳ミルクと葡萄酒ワインをたよへて流れたといふ。
私の若さは漕艇ボートに足り、且つ酔ふことが出来る。

スパークテイニング

ボーイー！ もつこ強い酒だ！
漕手！ もつこ強い血だ！

血脈

地球儀をぐるぐる縦横する經緯線・
はりきつた筋肉の血脈・

スパニシユ・セレナーデ

スペインの闘牛士と南國生れのジブシイ娘の戀だ。
巨大なキャブテンと優姿のコックスが語らふ影だ。

クレオパトラ

クレオパトラに蹴られた風は沙漠の旋風となつてこがれ死んだ
破れた橈奴ボートマンの靴は水原かわの波紋なみとなつてもだえ沈んだ。

毒 蛇

勝ちほこつてゐる毒蛇め！
おれの唇に噛みついた口惜さが
はけしい毒になつて血汐ちぢに混じ
全身をめぐつてくるしめる。

ウインダーミヤ夫人の扇

勝利の誕生日を祝つてあけやう、
颯つとひろけた水脈、
川風をそよがせる扇である。

カメレオン

緑色の葉に虐殺を救ふ怪奇な保護色がひかる。
青い水にローリングをおさへる巧妙なストロークがうつる。

ユニフォームで装訂された考古學

化石に象形文字がかいてある。
筋肉に競漕史がかいてある。

野牛狩

漕輪スライドはまわり
筋肉が
幌馬車のやうに
こぶ、こぶ、

さあシンバルをよたいて
應援しやう

漕手の野牛狩よ、
熱血兒の冒險よ、
あくまで
勇敢におへ、
漕獸をおへ

●
脅艇をにがすな、
意氣をしこめろ。
●
狂艇の生命をしこめろ。

●
決勝線の一發は
暴れくるふ脅艇を射こめ
たちまち狂艇はたほれる。
くるしさにたほれる。

●
夜だ夜だ。
勝利者の胸は毒矢をすてる。
アメリカインディアンの炬火をたいて
覇氣を獲物に歡喜しろ。

平
和

撓劍オケをすてた
敵味方の漕手が
浴槽にあつまつて
恕號の禮辭をかはしながら
筋肉の圓舞がはじまる。
夜の平和がはじまる

寵艇詩章

秋の
夕暮れ
艇ふねがわたる。
ないてかへる。
水には
淡い月

虚空に
翼^{オア}をひろげて
漕^{フオーム}姿は
ほこらしげにみえる。

龍骨^{キール}に
固い筋肉が
翼を漕ぐ
筋肉が
緊^キつちりついでる。

向ふから
漕姿あざやかに
鳴禽類がこんでくる。
囀へづる怒號
可愛らしい
無駄のない肉付

わかい艇が
あそびつかれて

水中の枝に
こまつてゐる。

艇ふね肺で意氣する

艇ふね温い血の

こゝろ かん かん。

風を切る翼オア橈カ

風を裂く艇トッブ嘴
美である。
美である。

新裸體俱樂部

赤い夜

かどり火をたいて幌馬車が圓く露營する夜

カウ・ボーイが紅い首ネックピース布を無造さに頸にまきつけておどる夜

戀人の瞳に二ツの唇が輪になつてもえる夜

なくなつた紅玉ルビーが探偵の頭をぐるぐるまわる夜

心臓が輝きだしたレースの前の夜

勇氣と歡喜と幻影と瞑想の赤い夜。

果實店

一個の大きな西瓜も忽ちに九人の手の虹である。

棚のパイナップルも甘い夜露にうかぶ九つの皿の月である。

櫻んほに粗い雪をかけばオーロラである。

あゝ果實店は郷愁の色彩で一溢だ。

自然の醋ばさに俺の舌も泣いたよ。

それにお前の手にぶらさがつた紅いリンゴの皮が氣象旗のやう
に氣にかゝる。

秋の唄

青空ミ地球が遠く冷く別れて行つた。

銀色の魚が新月形に艇にこびこみ
漕手の瞳の中をびちびちはねた。

ハンマーを打ちこむ鐵骨の響が
オアーを引く筋肉の力が
秋の奥深く無限に擴つてゆく氣配

この頃私は合宿へ見舞にくる人の葡萄の房のやうに甘まさうな
瞳をなつかしむ。

皿

白い布の上に寝ころんでる皿

焼きたての情慾をのせてもこはれない機械のやうな皿

あゝ情慾が啖べちらかされた不潔な皿

お前をうらがへすこ歪んだ白い尻に暗い世界がうつる。

お前の胸に一粒のグリーンピースをころがすこ飢へた俺の胃を

よろこばす腫になる。

お前の乳色の肌にとマトの皮をのせた情調ほど俺を惹きつける
ものはない。

お前の健康と美貌がつゞくかぎり、いろいろな男の啖ふ情慾の
下敷になる合宿の皿
夜の女の白い齒のやうに灯にキラキラと笑ふ皿。

赤い輪

唇に紅をつけてはけしいキスをおした
貴女の手紙には何も書いてない。

純白のユニフォームの胸に
ひきつけの傷の血が滲んでゐる。

ねえおわかりですか
赤い輪が何だか

赤
ご
白

眞紅にむけた肉を
美しいオキシフルで濡らすご白く沸騰する。

これが唇であつたら

白い歯であつたら

あゝ貴女の痛いほどのキスであつたら

反
抗

貴女は美しい網をひろげて私を掴へやうごしてゐる。

舵手は鋭い言葉を浴びせて私を漕がせやうごしてゐる。

なにを！

反抗だ！

あゝけれども けれども
私はひきづられて行つた。

新裸體俱樂部

八月の合宿は丸々こした臀をならべて
誰も彼も裸體だ。

娘さん

新裸體俱樂部に羞恥なんていりはない、
そこにちらばつてゐるのは健康さ桃色ばかり。

汗をのむ

一滴のまる味、
夏の地球のやうな熱さよ
そこに苦んでゐるものは裸體だ。

一滴のうま味、
海水のやうなからさよ
そこに渴いてゐるものは漂流人だ。

約 束

夜の十二時が鳴つたら妾を思ひだして下さいといつた彼女。
疲れてから力を合せてふんばれといつた舵手。

笑つちやいけない、これが私達の眞面目な約束なんだから

觸覺のブレード

彼女の手こそすれすれに
ふご私の手を置いた。

指・指・觸覺のブレード

櫛の齒のやうにぴつたり整へたオアーだ。
その瞬間私は燃へたのだ。

水をのむ彼

齒並が貝殻のやうに守つてゐる彼の咽喉、
赤い柔い肉の壺へ
快い冷い水が入つていつた。
彼の腫は海のやうに揺れた。

アトラスになる

美しい地球を肩にしたアトラス

輝く艇をさゝけた漕手

彼は青空に向つて重い力の弧線を支へる影である。

夜會服

黒い肌に光る汗の玉

月光に輝く寶石の数々

血・血・血・花火・花火

ユニフォームをきた俺の肌は
何ぞ立派な夜會服だ

一二すじの線

私は彼女の涙をちつこみつめる。

日にやけぬ腕の内側。

あゝお前がかくしてゐた白い一二すじの線

頭に浴びる

くりくりの頭にはもう汗ではなくて
すさまじい空気を浴びる。

白いユニフォームを浴びる。

またゆるやかにスポーツマンハットを浴びる。
疲れたら大きな毛布を浴びる。

青々とした頭には九月の感覚を爽に浴びる。

私はおもふ

私はおもふ
私の美しいユニフォームを縫ひながら
あゝその一本の針が
レコードの上を走るこきのやうに
その人の胸にたのしいメロディをひゞかせたこころを。
あゝ私はおもふ
その人をやさしい戀人のやうに。

尻

白い 丸い 弾力性に富んだ尻
地球をくるんだ嵐の前の雲のやうに電氣をたゞかはす尻
みよ あのとくましい現象を。

かなしげな夜

—レースに敗れて—

かなしげな夜よ

赤い月

泣きはれた漕手の瞳

あゝ俺は一人ほつちでゐたい。

彼女をまつ

あゝなんこいふいらたどしい時の移りよ
私は噴上のほごりで彼女を待つてゐた。

ほんやり水にうつた彼女のシヨール
うんこ霧を吸ひこむこ心齋の中に出來た虹

私は川のほごりで季節を待つてゐた。

宗 教

トルコ帽は傳統の赤さをもつてゐる。

漕手は朱房のやうな心臓をほこつてゐる。

あゝなんご美しい宗教だ。

空

空色のパラソルをさして少女はたのしかつたよ。

青空にぱつと運動神経をひろげて私はうれしかつたよ。

戀 愛

監獄の鐵格子のやうな漕手の腹筋は
白鳩のやうにさぶ少女の乳房を遠ざけた。

絹 糸

吊ランプの紅炎の下で
貴女は一本の絹糸を兩手にピンと張る。

美しい韻、美しい光澤、美しい色の波。

夕陽に照りだされた艇脈をみつめるやうに
貴女は一線のリズムた酔ひしれてしまふのだ。

美しい襪

貴女の手が食卓の布巾につくるたくみな襪
貴女のスタイルが外出衣につける美しい襪
貴女の背中が純白のシートによせるやさしい襪
漕手がフォームにもつ筋肉のたくましい襪
あゝ一寸でも身體を働かすたびに惜しけもなく美がこぼれおち
るのだ。

心臓をきく

もう二十年も杭打ちの鼓動が胸にひびいてくる。
あゝ心臓の治水工事の素張らしさ。
そこには青空ほどの廣潤さが映り、
瀑布のやうな圧力がたゞきつけられる。

ローマ

——一九二五年の商大クリュー——

艇をさしければ凱旋門

コースを走れば軍道

歴史を真紅に塗りつぶすには

キヤッチが剛健で精鋭なよい武器だ。

——註・商大の校色は真紅——

三色旗

水色の海洋圖に赤い一線を描かう。

あざやかに明日のコースをしるさう。

浮きたゞよふ赤き珊瑚礁

波に洗れる赤き船底

海鳥の赤き嘴

紺、赤、紺……

おゝわれ等の艇にひるがへる三色旗。

——慶應の校色は三色旗——

黒 奴

それが墓石であるとも知らず、
強ひられ、鞭うたれながら
私は炎熱の砂漠にピラミットを積みあけてゐた。
あゝそれはなんといふ粗野な原始の姿だ。

めざめてみれば
熱けこけた筋肉を築く私だった。

夜をすてる

コップからビールをすてた。
心臓から夜の香りをすてた。
窓からセレナーデをすてた。
あゝもうシャツとパンツのカーテンをめぐらした中に
疲労が他愛もなくなるばかりだ。

ホッケーゲーム

神聖なるボールにかけて三度誓ふブリー、
上品なコンピネーションこそ紳士のプレーである。
パスを握手する・粗野をタツクルする
勇敢の禮儀は潑刺こしてゐる。

牧羊球の歌

牧羊神は審笛を吹奏してゐる。
白羊をドリブルする牧羊杖だ。
狼のタツクル・飢えたる勇氣よ
ヒツプヒツプ・ヒツプ——草の葉が叫んだ。

雪

スキーヤーの眼に女の匂ひがする。
軽い嬌態が心臓をひきつける。
白い肌が筋肉によりそふ。
この雪が爛熟おぼろくなつたらと思はずにはゐられない。

スクラム

華かなる季節をこびまふ隋圓球よ。
冬の蝶をこらへんこするラツガーに
寒風の花辨を衣たプレーヤーに
スクラムは蜜でかためた骨の花だ。

ベースボールゲーム

スタンドのセレナーデ。
戀人の瞳は彼のグローヴの中に投げられた。
シャンデリヤのマークをつけて
白線の旋律を走るんだ。
抛物線の圓舞をこばすんだ。

昭和二年十一月二十八日印刷
昭和二年十二月一日發行

詩集 中世紀
定價 壹圓二十錢

版權
所有

著作者
發行者
印刷者

竹中久七
石田保治
前原市太郎

發行所 詩
發賣所 集

之家出版部
川崎市砂子一ノ二六
文堂書店
市京市外巢鴨上駒込傳中二八

● 中世紀 竹中久七第二詩集 壹圓二十錢

● 夕の花園 久保田彦保第二詩集 六十錢

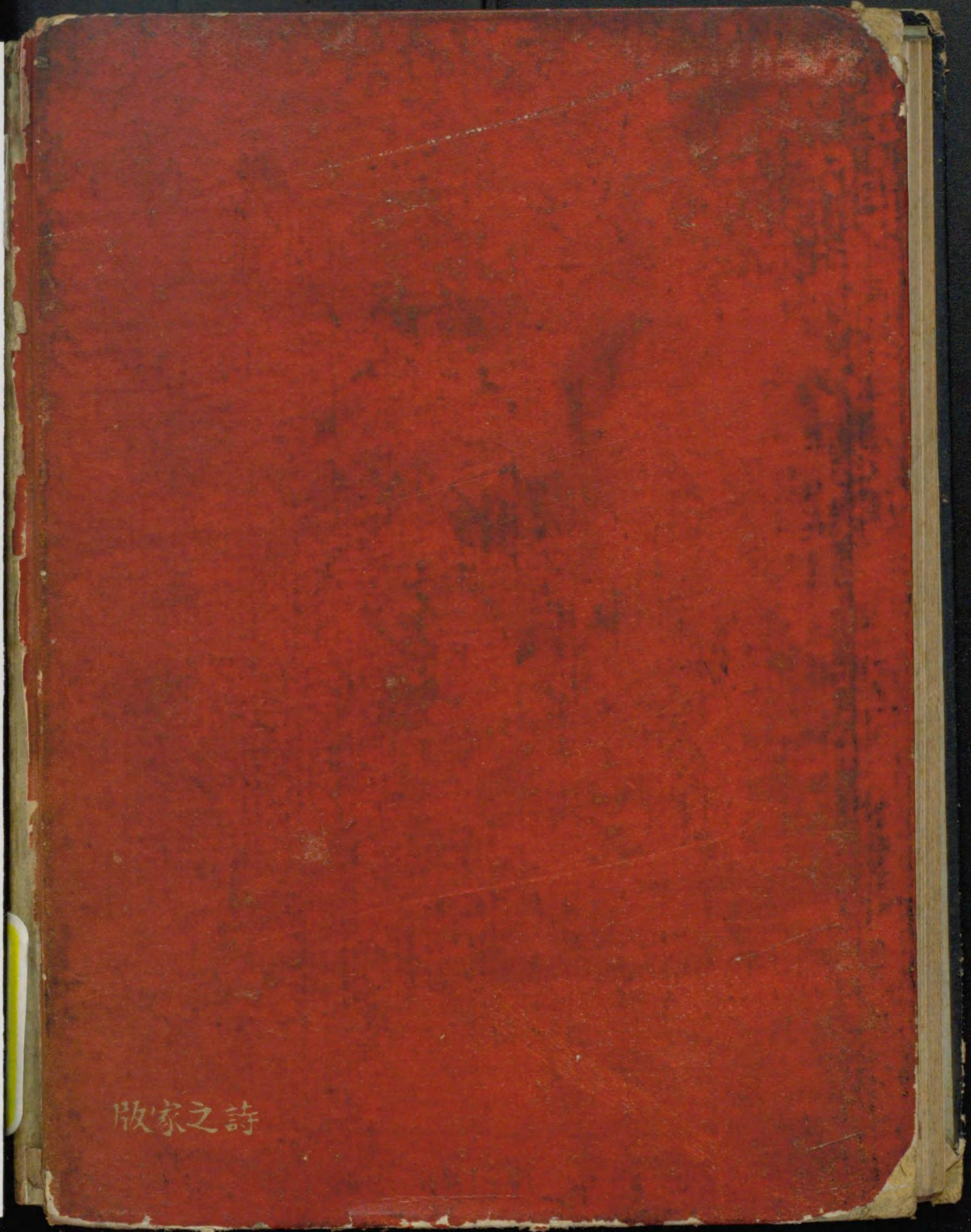
● 端艇詩集 竹中久七第一詩集 壹圓

● 駿馬 久保田彦保第一詩集 壹圓

● 月刊詩誌「詩之家」發行所

詩之家出版部

585
11



散家之詩